



在京古高同窓会
会報

新年会特集号

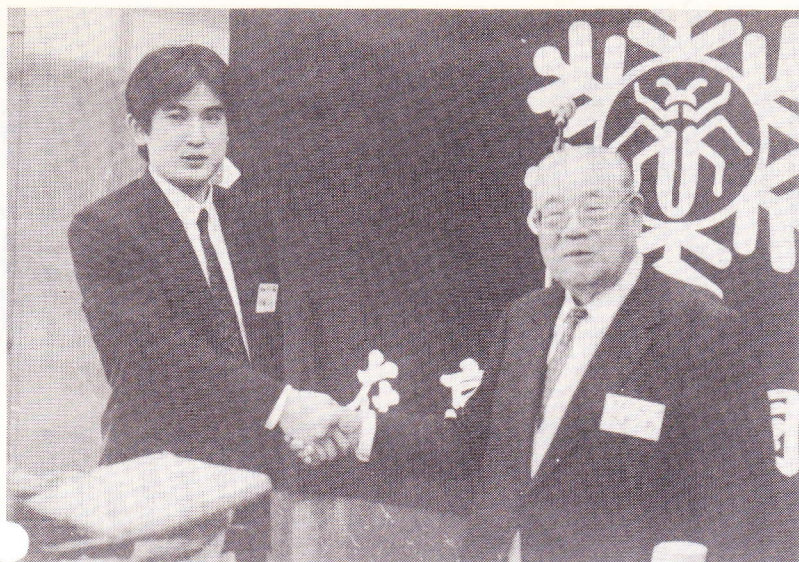
〒150 東京都渋谷区渋谷
3-20-13第2平野ビル 302号室
美蓉通商南内
☎ 406-1585

世代を超えてガッチリ握手

写真でつづる新年会

逆雪旗の前に、幾世代も離れた会員
同士がガッチリ握手。一月二十日に催
された新年会での一コマです。

本号では、若さにあふれたこの新年
会の模様を、フォトストーリー風に回
顧してみました。



底冷えのする寒
さに見舞われた東
京、ここ永田町・
憲政記念館が、新
年会の会場となり
ました。当日は、
午後二時が開会予
定時刻となってお
りましたが、それ
を待たずに、続々
と出席者が集まり、
飛び入りも含めて
百十八人の会員が
参加しました。

午後二時。まず
は、伊藤守治新年
会実行委員長のあ
いさつから。「今回
は、講演会と福引
抽選という二つの
目玉を設けました。
皆さんの力をお借
りして、実りある
会にしたいと思い

会費納入のお願い

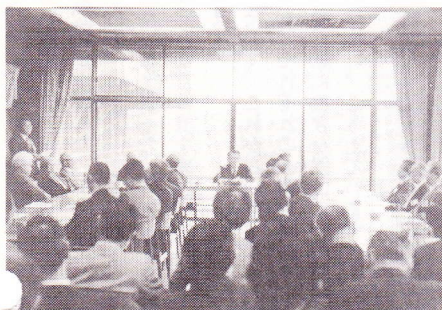
現行会計年度（平成元年十月から二
年九月）の会費は、二月末時点で六百
六十七人が納入し、納入者数は昨年同
期を相当上回っています。

未納会員に改めて郵便振替用紙を同
封しました。わが同窓会の一層の発展
のためぜひ、ご協力をお願いします。

「拍手をもって出席者は応え、会
は幕開きとなりました。」

「社長学」を学ぶ

続いて、「実業家になるには三つの条
件があるといわれますが」ときりだし
たのは、昭和十二年卒で現在コパル電
子の会長をなさっている佐々木喬さん。
そしてこの日の講演会の主役です（写
真1）。若くして創業者となられ、長く
会社の経営にたずさわってきた方らし
く、落ち着いた口調で聴衆に語りかけ
てきます。そして、旧制古川中学に入
学した当時の思い出話から今日に至る
までの自身の半生を、時には、「私は社
長になりたくてなったというわけでは
なくて」と、出席者の微笑を誘いなが
ら、しかし、平坦ではなかった道のり
から生み出された言葉は、強い説得力
をもって聴衆をひきつけ、三十分とい



講演に耳を傾ける出席者

1

う講演時間は、あっという間に過ぎて
いきました。（講演内容は二面に掲載し
てあります）

ここで会は一時休憩、みなは、逆雪
旗とオードブルの待つ懇親会会場へ。

老いも若きもなごやかに

壇上にはすでに酒樽が用意された懇
親会の会場。同窓会副会長の多藤省徳
さんのあいさつに続き、校歌が斉唱さ
れました。総会でお馴染みとなりました
た元応援団長、浅野勝弘さん（昭和五
十三年卒）が壇上へ。昭和五十年代卒
の同窓生がそのまわりを囲み、声をは
りあげます（写真2）。世代を超えて歌
い継がれてきた校歌が会場全体に響き
わたり、出席者の心がひとつになって
いくのが感じられました。

古高の伝統を感じさせるシーンが、
続きます。冒頭でも紹介しましたが、
新年会の一大セレモニー、鏡割りでは、
出席者最年長の伏見二郎さん（大正十
五年卒）と最年少の伊藤公一さん（昭
和五十九年卒）が木槌を振り下ろしま
した。写真3は、その瞬間をとらえた
ものです。

さあ、会は本番に突入していきます。
知っている顔、初めての顔。年輩の方



昭和50年代が声はりあげて

2

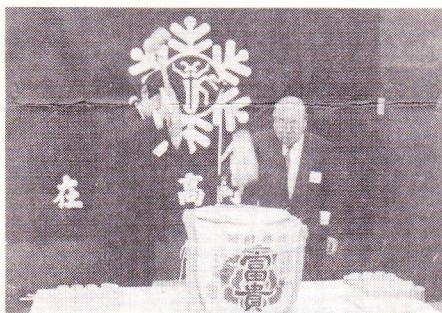
若い人が入り混じりあい、古高同窓会
ならではの、なごやかで、そして、独
特な雰囲気醸成がなされています。

その談笑の合間を縫って、さまざま
な余興が展開されました。目玉はもち
ろん、会員有志の提供による福引抽選
です。釣り道具やゴルフウェアなど豪
華な景品が並び、出席者は百十八分の
一の確率に賭けています。それだけに、
番号が読み上げられるたび、会場は歓
声でいっぱいになりました。最初、マ
イクの調子が悪く、酒のまわった出席
者から野次がとぶ一幕もありましたが、
それもまた楽しい新年会なものでした。

また壇上には、各年代の方々が集ま
り応援歌などを披露しました。印象的
だったのは、若者に負けじと、昭和二
十年代卒の方が、スポーツも勉強も県
下に名を轟かせていたころのことを語っ
たことです。「古き良き時代をいままも」
は誰もが願っていることなのです。

合言葉は「総会で会いましょう」

古高健児の本領がいかに発揮され
た三時間半、外の寒さも忘れ、その
熱気は春を呼ぶ、そんなムードの新年
会も幕を閉じました。みんなの合言葉
は、「秋の総会でまた会いましょう」。



セーノットと鏡割り

3

佐々木喬さんの講演抄録

実業家になるには三つの条件があるといわれますが、私は、倒産と病氣という二つの条件は満たしています。

これまでの人生を振り返ると、人間にはそれぞれ運命というものがあって、与えられたチャンスをうまく活かすことができれば、大きな成功を得ることもできる、そう思っています。山あり、谷ありの波乱万丈に富んだ人生でしたが、現在は、終わりをければ全てよし、そんな心境でしょうか。

昭和十二年、旧制古川中学を卒業した私は、仙台高等工業専門学校から東京工業大学の電気科に学びました。その後、海軍航空技術廠に勤務しており、郷里の田尻に帰りました。間もなく、「英工舎」が海軍出身の電気技術者を求めているというので、始めは腰かけのつもりでしたが、桐生工場の技術課長として就職しました。

ところが、時はまさに戦後の混乱期、インフレ経済や労働運動の影響などで、昭和二十四年「英工舎」は倒産の憂きめにありました。そこで「英工舎」の幹部五十人ほどとともに「桐生英工舎」を設立し、経営の道に足を踏み入れることになりました。もともと社長になりたくてなったというわけではないのですが、つくった会社を絶対つぶしてはいかん、ということを感じてやってきました。当時、特雷景気でメーターがよく売れたほか、横河北辰電機（現横河電機）から注文を受けたサーボモーターも売上拡大に大きく寄与したものでした。それまでの時計メーカーの技術から、より広い技術分野へと会社の方向を転換したのです。三十五年、社名を「日本サーボ」と改め、三十七年には東証二部に株式を上場することもできました。

ところが、そんな矢先、またもや不況に見舞われ、そのため日立製作所の系列下で再建を図ることになったのですが、諸々のいきさつから四十一年、私は退社することになり、再び浪々の風に吹かれる身となりました。

しかし、翌年、知合いの「コバル」会長の励ましと協力で、「コバル電子」を設立することになりました。「日本サーボ」の社員を集めてつくった会社ですが、私は年が若かったため、社長でも給料は安かったと記憶しています。この時、真のリーダーシップとは自分自身を捨てたときにこそできるものだと、身をもって感じました。

「製品に対する信用はお客さまが決めるもの、大手に使ってもらえる製品をつくらう」をモットーに、四十五年サーメットトリマーの開発に成功し、販路を拡大していきました。四十九年には故郷の田尻に工場を開設し、サーメットトリマーの生産拠点として当社の発展に大いに貢献しています。

私は常々「国は技術で興り、技術で減ぶ」ということを考えております。経営者は技術の向上を、常に考えなくてはならないと思うのです。現在当社はサーメットトリマーの他、半導体センサーやトレオンミラーなどの新しい分野にも進出し、海外でも評判がよく、田尻、入間、佐野の三工場体制で業績の拡大を続けているところですが、従業員は九百名ほど、年間売上は百七十億円です。

ベンチャースピリットなど口では言いますが、企業というものは保守的になりがちです。そこで、企業経営にあたっては、保身よりリスクを恐れない企業風土をつくるのが大切であり、そのためにも、管理職を中心とした意識改革が必要なのです。また、これからは「技術屋」といって

も、単に技術だけでは成り立たないと思います。しっかりした技術に加えて戦略が重要になってくるでしょう。さらに、いざというときには、「開き直り」も必要です。私も開き直りで幾度となく苦境を凌いできた経験があります。

そして、これからの企業は、なによりも、それぞれの人の人間性や、社会への貢献に重きを置いていかなければいけない、と考えています。

ひとことインタビュー

昭和七年卒の伊藤正志さん

「同級生の出席者が少なくて残念。こんどは同級生を誘ってきたい。」

昭和十五年卒の秋山房夫さん

「有意義な講演が聞けてよかった。今度も講演を企画してほしい。」

昭和二十九年卒の岡崎博さん

「同期生が十人以上きました。二十年ぶりの再会は有意義です。」

昭和四十年卒の佐藤啓三さん

「人が多かったせいで会場が狭く感じます。血圧計が当たってうれしい。」

昭和四十九年卒の鈴木健太郎さん

「若い人が増えたらいいですね。新年会は継続してやってほしいです。」

昭和五十八年卒の浅野修次さん

「とにかく、年代の壁を越えたいすごい雰囲気がありますね。」

鏡割りをされた伏見二郎さん

「懐かしい顔が見たくてきました。盛大がいいですね。」

同じく鏡割りをされた伊藤公一さん
「こんなに人が多いとは思いませんでした。とても心強く感じます。」

福引景品と提供者

『同窓会会員の苦勞のエキス』として提供された福引景品の提供者を紹介します。

- ・コバル電子の佐々木喬さん
- ・電動つり具（五セット）
- ・血圧計（十五個）
- ・それぞれに単行本プラス（二十冊）
- ・コバル電子の部品を使った製品
- ・蝶理社の今野栄喜さん
- ・ゴルフウェア（一組）
- ・肌着（一組）
- ・蝶理の取り扱い商品
- ・同窓会会長の伊藤宗一郎さん
- ・南部鉄ビン（一個）
- ・紳士折りたたみ傘（五本）
- ・サントリーウイスキー（十本）
- ・こけし（一本）

景品総額は五十万円ほどで、三十二人がこれを手に入れました。あらためて提供者のご厚意に感謝する次第です。どうもありがとうございました。

出席者を卒業年代別にみると

- 大正 …………… 一人
- 昭和一ケタ …………… 十二人
- 昭和二十年代 …………… 十二人
- 昭和三十年代 …………… 二十六人
- 昭和四十年代 …………… 十三人
- 昭和五十年代 …………… 十四人
- 昭和二十年代をピークにした富士山型の構成といえます。なにより、若い人が多いというのが（昭和四十年以降で全体の二割以上）目をひきます。

伊藤会長が十選



当同窓会の会長で衆議院議員の伊藤宗一郎さん（昭和十六年卒）が、二月の総選挙で十選を果たしました。

一昨年には、議会人最高の名譽である「勳統二十五年表彰」も受けておられます。心からお祝いしたいと思います。

「マレーシアにぜひ」と同窓生「味の素マレーシア」取締役としてクアラ Lumpur に駐在の昭和三十五年卒、我妻一美さんから事務局に「マレーシアは清潔で良いところです。同窓の方々にぜひ旅行に来て頂きたい」と思います。航空券、ホテルなど割引料金でお世話します。マレーシア一番の名門ゴルフ場でプレーもできます」とのうれしいお手紙が寄せられました。我妻さんの連絡先は事務局が承知していますので、お尋ねください。

会報委員会から

これまでの同窓会会報と新名簿は、「本宮デザイン」の本宮直助さん（昭和九年卒）に全面的にお願いして発行できました。本宮さんは、七十歳を超えておられるにもかかわらず、これらの発行のため徹夜までされるなど尽力して頂きました。同窓会がここまで発展した際にはこの献身的な努力があったのです。労働多くして報われることの少なかつた本宮さんに大きな拍手を贈っていただきたいと思っております。さて、この臨時号は、図書作成、印刷などの株式会社「ケヨー」を経営されている早坂清吉さん（昭和二十九年卒）に本宮さんと同様のご協力を得て発行できたのです。実は「今度の会報をどうやって出そうか」と思案していたのですが、快く引き受けて頂き、愁眉を開いたのです。問題が起これば、解決してくれる同窓生が必ず現れます。わが同窓会の層の厚さと理屈なしの母校愛をしみじみ感じているところです。この臨時号は、昭和五十七年卒の佐々木達也、今野浩明両君が企画から原稿執筆、編集まで一切をやってくれました。これからの会報も立派に作ってくれらることを確信できる鋭い会報委員です。よろしくお祈りいたします。

（会報委員長 樫沢克彦）